

## 政治に係わる二つの観念をめぐって

——明治150年に寄せて——

升 信夫

幕末維新の歴史研究には膨大な蓄積がある。それとは縁遠い筆者が、この鹿児島の研究会で可能な報告があるのかを考えたとき、浮かんだのは、幕末維新を、歴史分析ではなく、政治判断の様態という点から扱うことはできないかということであった。幕末維新、特にその中でも大政奉還から鳥羽伏見の戦いまでの間は、たとえば、キューバ危機のホワイトハウスや玉音放送前夜の永田町周辺のように、渦中にあるものたちにとっては、流動する状況下で濃縮された時間が流れた。時間というものには出来事を成り立たせる容器的なもので、そこに詰め込まれる出来事はゼロに近いものから無限大まで広がりをもつ。膨大な出来事が詰め込まれた時間にあっては多様多種の言説が交わされ、そこに係わるものは、その言説のいずれかを次々と選択しなければならない。そしてその選択の結果が歴史的事実となって立ち現れる<sup>1</sup>。アクターたちは、どのような意識過程で、どのような言説を選択したのだろうか。

次に、昨年、高知で開催した民権運動を巡る研究会との関連性も検討に値するように思われた。民権運動というと、西洋の政治観念を移植しようとする運動であり、西洋を異文化として排撃しようとした攘夷思想とは、相互排他的な運動であるかのような印象がある。しかし、たとえば多摩川左岸地域で漢学を学び、剣術に勤しんだ豪農たちの間から、幕末には近藤勇、土方歳三が登場し、明治の民権期には五日市憲法草案が生まれた。新選組というと体制側の反動的組織のような印象があるが、その母体となった浪士組は尊皇攘夷の活動家である清河八郎を中心に据えた組織であり、近藤勇も強い攘夷思想の持ち主であったといわれている<sup>2</sup>。攘夷思想から民権思想まで、豪農、

剣術、漢学など、多摩川左岸地域には、ある意識の連続性を見いだすことができる。民権運動の志士は、尊皇攘夷の志士に自己を投影させていたのである。民権思想と攘夷思想の関係についての研究は、どちらかという、民権運動から遡行して攘夷思想を捉え、両者に権利志向的な共通性を見いだそうとする傾向があるが<sup>3</sup>、逆に、攘夷運動から民権運動との連続性を捉えることで、民権運動の権力志向的な側面を指摘できるのではないだろうか。色川大吉が「民権運動が一般的には豪農層のなかによびさましたものはかれらの権力参加の欲望であり、それにもとづく現状打破の政治意識と世界史の次元にまで拡大した視野でのナショナリズムであった」と論じている通りである<sup>4</sup>。また豪農豪商、攘夷思想、漢学、剣術などの初期条件を与えると、政治的態度が必然的に決定されるかの印象もあるが、たとえば近藤勇と根岸友山は、その初期条件が非常に類似しているにもかかわらず、維新の過程では敵対する立場を選択しており、思想のみが政治的態度を決定したわけではなかった。ここでも何が判断を左右したのかの問いが生まれる。これらの問いを念頭に置きつつ、幕末維新の過程をみてゆくことにするが、それに先立ち、いくつかの事柄について確認しておこう。

## 1. 前提とする事柄

1) 一般に一つの名辞には、多様な意味がある。図 1 に示すように、その多様な意味に共通する核を確定し、その言葉の中心部分とすることができるようなイメージが生まれがちであるが、その不可能性については、かつて丸山圭三郎が指摘したように、ノミナリズムからソシユール、ウイトゲンシユタインに至る過程で明らかにされている。この知見によれば、一つの名辞は、図 2 のように、コミュニケーション手段として多くの人が多様な環境で用いる過程で多様な意味を帯びようになり、図 1 のような共通核を設定することはできない<sup>5</sup>。

2) そうした名辞が集合して言説が構成され、その言説を介して、いわゆる物の見方、考え方が多様な形で成り立つ。そうした言説は、名辞の集合として存在する以上、日常に交わされる言説の場合、上記 1) の名辞の場合と

図1

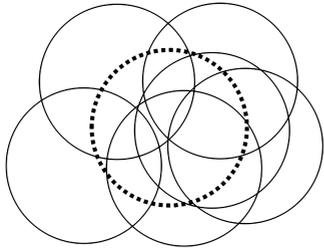
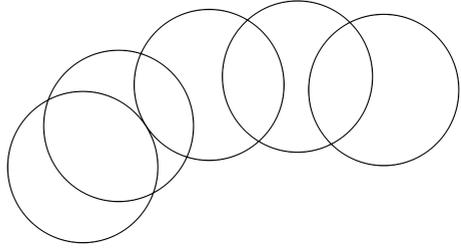


図2



同様、確固として閉じた実在物として存在しているわけではない<sup>6</sup>。

ここで幕末維新で頻出する攘夷という言葉、言説を考えてみよう。攘夷に係わる言説は、開国の言説と分節化され相互排他的な関係にあるように思われる。そして巷間、攘夷と開国は、場合によって血を流して対立した<sup>7</sup>。しかし、当時の人々が、みな同一の意味を攘夷という言葉や言説に込めていたとは思われない。たとえば攘夷を掲げた人が皆、即座に武力に訴え外国を打ち払うことを考えていたわけではない。

1850年頃から1870年頃の20年は、世界的にみても、世界経済の進展と、主権国家体制の強力化の中で、流動化が進んでいる。そこではクリミア戦争、普墺戦争、南北戦争、普仏戦争を経て、19世紀末の総力戦遂行のための国民国家体制が確立しつつあり、複数の国家が、競い合って暴力的に領土を拡大し、また国民を戦争に動員できる体制を構築しつつあった。複数の主体が競争を行うという場合、まだ競争に参加していない主体には、その競争に参加する場合と参加しない場合がある。競争は共通の価値意識にもとづき、どちらがより多くの価値を獲得するかを巡り成り立つ。競争では、その価値意識を主体の隅々に浸透させたものが有利になる。そのためには、旧来の価値意識、行動様式を超克しなければならない。他方、競争に参加しない場合は、旧来の価値、行動を温存することができる。19世紀半ばからの東アジアの状況は、欧米諸国から、競争への参加を半ば暴力的に強いられた過程であった。朝鮮は、扉を固く閉ざして参加を拒み、旧来の価値を温存することに執着した。日本では多くの者が、旧来の価値に執着すれば暴力的支配を甘受せざるを得なくなると考え、競争論理への同化が不可避であると判断した。つまり西洋諸国に対抗する軍事技術を移植育成すること、そしてそれに必要な諸制度を構築することが目指された。ただ、競争の論理に惑溺すれば、主体

の独自性あるいはアイデンティティが見失われる。そこでアイデンティティを確認すべく過去に向かうまなざしも、競争参加への反作用として生じることになる<sup>8</sup>。

一方で、西洋という他者がもたらす競争の論理、他方で過去への自己確認、この両者の相互作用の中で、幕末維新の言説は編まれていったのであり、攘夷を巡る言説も、そうした相互作用の中で展開されていた。つまり攘夷とは、表面的には西洋の論理を排斥するものだが、それに打ち勝つということは、競争、戦いの存在を承認し、争いの尺度(価値意識)を共有することを意味している。その意味では攘夷と開国はヤヌス神のような表裏関係を持っていた。

攘夷は今日でいえばナショナリズムという概念にも近い。だが日本では近代的な主権国家はまだ成立せず、またナショナリズムという言葉も存在しなかった。そこで漢学の概念を援用しつつ、ナショナリズムの意味内容を示すために攘夷という言葉が用いられている。19 世紀の世界と、過去の中華帝国の環境には大きな違いがある以上、19 世紀的環境で、伝統的概念の攘夷という言葉を用いれば、当然、色々な齟齬が生じるだろう<sup>9</sup>。そして、実際の攘夷という言葉は、文脈や使用者により、表 1 に示すように、多様な意味を込めて用いられていた。

たとえば、久坂玄瑞は、「解腕痴言」で、「幕府の有司共穢き悪き心もて首を屈して尾を垂れ夷等の願い求むるまにまに媚び従い邪教堂を建て商館を築き美尼須篤兒を府下に置き我土地を貸し我土人を役するを許すに至る」<sup>12</sup>と書いているが、ここに示された攘夷思想は、②を中心にしながら①の要素を含んでいる。「経緯愚説」での真木和泉も、同様だろう。

「人数は揃わずとも、武器は不備とも、小敵大敵の差別なく、一步にても踏み出させたまひ、錦の御旗を翻し、おのれにくき禽獣め、一人にてものがさじ、と勇み進みたまわせなば、或いは兵糧なし、或いは軍用なし、艦なし、砲なしなど身勝手の事ばかり云い噪ぎたる者も、天晴れ、御門の親征したまえるに、器械など云う時にあらず、丸裸にても御先に立、御楯とだにならましと真の気前になりて防ぐべし。」<sup>13</sup>

表 1

①華夷思想／中華思想	中華を文化的中心と捉え、周縁を夷狄として埒外の存在とする。
②純朴な排外主義（紅毛人忌避）	鼻が天狗のように高く、目が青いなどといった西洋人の特徴を話に聞いただけ汚らしいものと思ひ込む。
③経済的排外主義	横浜開港後、日用品（油、薪、炭、綿、糸、紙など）の高騰が続く中、民衆の間には、排外行動への共感があった。
④対外防衛・独立意識	軍事的脅威として西洋諸国を捉え、それらによる侵略から国を防衛するという意識。また対外的自立の獲得。
⑤帝国主義的攘夷	無謀な攘夷を否定、通商条約を容認し、その利益で海軍をおこし、十分な安全保障体制を整えた上で、対外進出をはかるという帝国主義的政策。 <sup>i</sup>
⑥社会的上昇手段・不満表明手段・体制変革手段	豪農、豪商、あるいは郷士などの若者には武士となって力を発揮するという上昇意識を持つ場合が少なくない。また条約を結び開国する幕府（現体制）を否定することだけを目的とした攘夷。
⑦幕府の政策への反発としての攘夷	排外主義の攘夷ではなく、貿易、開国が幕府によって独占されることへの反対の意思表示としての攘夷。 <sup>ii</sup>

<sup>i</sup> 町田明広『攘夷の幕末史』講談社現代新書 2010 年 80 頁

<sup>ii</sup> 高野澄『清河八郎の明治維新』NHK ブックス 2004 年 12 頁

これに対して、中岡慎太郎の以下の文では、ワシントンによる対英独立戦争が「鎖国攘夷」と解されている。ここでの攘夷は、④の対外的独立の意味で用いられている。

「夫れ攘夷と云うは、皇国の私言に非ず、其の止むを得ざるに至っては、宇内各国、皆之を行ふもの也。」「華盛頓米地 13 邦の民を帥い、英人を拒絶し、鎖国攘夷を行ふ。」「ゼルマニアの属国たりしも、亦能国議を定め、拒絶攘夷を行い、戦争 8 年、戦う毎に悉く敗すと雖も、其の末に至って一戦能く奇を出し、大いに「イスパニア」の軍を敗り、爰に於いて「ゼルマニア」遂に独立す。」<sup>14</sup>

また過激な攘夷主義者であった吉田松陰の攘夷思想を②で理解すれば、松

陰がアメリカ船で密かに渡米しようとした試みは説明できない。松陰の攘夷思想は、④と①から構成される。その際、④の安全保障方法を巡る議論、あるいはそこから発展した⑤の議論では、もはや攘夷と開国は分節化されて対立するものではなくなる。孝明天皇と長州藩は、ともに強固な攘夷主義者であったのに、どうして対立関係に至るのか、あるいは近藤勇は攘夷思想に共鳴して浪士隊に参加したのに、どうして同じ攘夷思想の浪士たちを取り締まる立場になったのかなどは、言葉、言説の多様性、空なる性格などを考慮しないと説明できないだろう<sup>15</sup>。

総括的に言えば、概念や言説は、実体性を持ちながら、実体のないものになる。実体性を持つとは、人々の日常において、意味や効果があるということであり、実体がないというのは、概念としては閉じておらず、厳密に定めることができないことを意味する。言葉が日常において実体を持つのは使用するものが、そう思うことによっている。

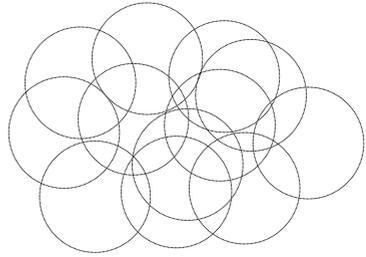
こうした考え方に立てば、たとえば「長州藩」という言葉も実体を持たない。いま幕府と長州が対立し、幕府が長州藩に軍を向け、戦闘になろうとしているとする。こうした時、幕府という概念も長州藩という概念も空なる概念であるとして、戦いには意味がないのでやめろと叫びながら戦場にかけだしていても弾に当たって命を落とすだけだろう。まさに戦を始めようとしている者には、幕府も長州藩も厳然として存在している。しかし、一方、では長州藩とは何かと問われても、確たる解答は見だし得ない。領地なのか、城なのか、藩主なのか、構成する武士団なのか、領民なのか、地域の文化なのか、多様な要素から漠然と曖昧に長州藩は構成される。そして、まさに決定的な戦いにのぞんでいても、そうした要素の全てが、幕府のそれらと対立しているわけではない。戦いが終わり、それらの要素が変化すれば、双方が融和的になることもありえる<sup>16</sup>。

### 3) 実践の場での判断

これまで述べてきたことから、日常におかれた私たちは、図 3 のように開放的で多様な言説に囲まれ、その中で、様々な事象に遭遇し、判断を求められていることがわかる。そのさい一般的な日常は習慣的な行動の連続から成り立ち、短時間に、影響の大きい多様な判断が求められる場面に遭遇することは多くはない。そのため政治が認識の対象とするような、連続する多様

な判断というイメージはつかみにくい。 図3

そこで一般的な企業の経営者の場合をまず考えてみる（企業経営者の場合、企業利益の増大という数字の基準で一元的な判断基準が存在するように思えるが、実際の経営の日常では、必ずしもそうではない）。彼らが日々求められる判断は、

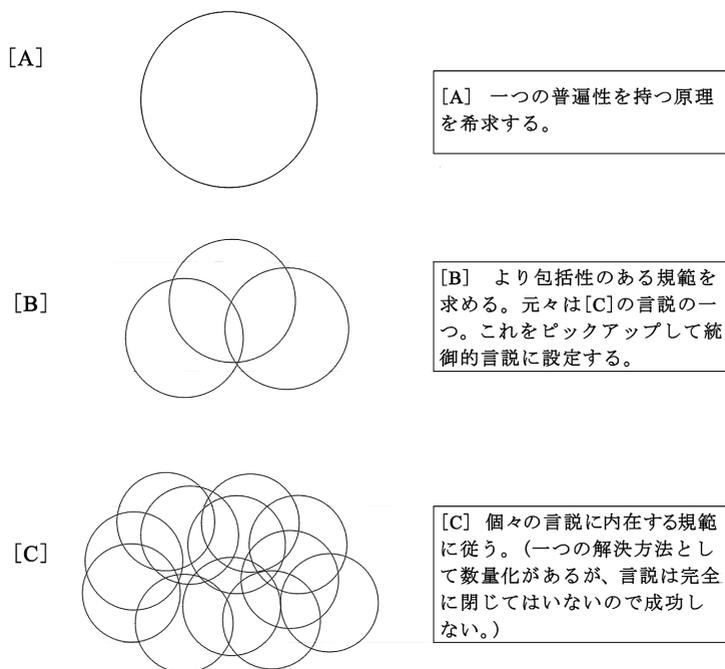


たとえば経営資金の調達など、経営を大きく作用しうる案件だけではない。企業の大きさとの係わりで決まる一定の基準以上の最終的な決済は、経営者の判断に委ねられる。そこには、空調、OA機器、事務用品等々の更新などがあるだろう。また社内の規定についても最終的には経営者が確認する。規程には、厚生施設の使用規定、残業規定、ハラスメント対策組織の規程などがあるかもしれない。これらは、それぞれに固有の言説により構成される。一律の基準で数量化し、数字の多寡で判断できるということはなく、その多くが関係性の薄い別個の言説である<sup>17</sup>。

もちろん、企業である以上、企業利益を最大化するという言説の支配を強く受ける。あるいは、商取引の一定範囲について、市場取引に任せる場合と、企業として組織化して扱う場合がありえるが、組織化した方がコストが安い場合に企業が誕生するという議論もある。そして、こうした議論に従うと、企業は純粋に経済的数量の世界にあるものにも思えるかもしれない。しかし、一度、企業としての社会的存在なると、多様な社会的要請、そして責任が生じる。従業員の福利厚生、地域社会への貢献等々、企業の経営者は、そうした様々な言説の中を生きてゆかねばならない。そこでは、時間的相克（時間が限られ同時に実現できない）、矛盾対立的相克などに見舞われる。

では、こうした場では、どのように選択し、判断を下したらよいのだろうか。このとき、図4に示すように、二つの方向性の中に置かれるように思われる。一つは、あくまで多様な言説に即して、それぞれの言説の価値基準に沿って処理してゆく態度、つまりあくまで[C]の中だけで対処してゆく態度であり、他方は、多様な言説を統御できるより大きな言説を志向する態度、つまり[B]の言説（あるいは更に大きな[A]）を希求する態度である。

図 4



[C]の場合、個々の言説の実在性を前提として、安定的に個々の問題を処理することになる（ゆえに保守的志向性を持つ態度といってもよい）。ただ、そこでは個々の言説に内在する判断基準に規定され、周囲の環境をヴィジョンをもって変革するという主体性はうまれない。わずかに自覚化が乏しく残る主体性があるとすれば、それはホップズの自己保存とならざるをえない<sup>18</sup>。

これに対して、[B]の言説で軸となる価値は、たとえば民主主義や自由、あるいは民族などであり、幕末でいえば尊皇攘夷である（多様な言説の一つに特権性を与え、上位に配置すると理解してもよい）。ここでは、自己を超えた何ものが想定され、その実現が目指される。[C]を支配する原理が自己保存であるのに対して、[B]から[C]では、高位の論理に対する自己放棄、あるいは解放がある。ただ、民主主義や自由という観念も閉じた観念ではない。そうした困難を超克すべく、これよりも包括的な観念を求めれば、最終的には、[A]の無限的な神や天となるだろう<sup>19</sup>。

こうした言説空間との関連では、政治についてのイメージは大きく二つに分かれるように思われる。一つは現実の政治過程の動きに注目し、どのように政策が実現されるのか、どのように秩序が保たれるのか等に関心を注ぐ傾きである。これは[C]の世界と親和性を持つ。他方、よりよい社会を目指す、より高い価値か何なのか考究する、そのための制度は何か考えを巡らせる、などの傾きをもって[B]に関心を向け政治に向かう姿勢がある<sup>20</sup>。この二つは政治学の研究分野に対応する。前者を軸に政治的事象を捉えようとするのは、政治学、政治過程論などであり、後者に関心を寄せる場合は政治思想研究に向かう。両者の間では、「政治」という言葉に対してのイメージが異なる場合が多い<sup>21</sup>。

なお、先の言葉や概念の空性に絡めていえば、[C]の世界では、[A][B]を展望しない場合、言葉は実体化して固定化されがちである。そのため対立が生じれば、いずれかが消滅するまで激しい抗争が生じることになる。ウェーバーが想定するデモニーッシュなものが登場する政治状況、マキアヴェッリが経験した政治の世界がこれと重なり合う<sup>22</sup>。

## 2. 幕末と政治判断（幕末における二つの論理）

旧来の割拠的幕藩体制は、軍事編成、教育制度、産業育成等々多くの点で国民国家体制構築への競争には適していなかった。競争の論理に適合的でありつつ、アイデンティティを担保してくれる制度の再構築が課題となり、これを巡り、濃縮された時空が現れた。雄藩中心の編成か、幕府中心の編成かが大きな軸であり、この中では、以下のような言説が乱舞することになる。朝廷中心の政権、幕府維持、幕藩体制の堅持、挙兵、議事院設立（徳川排除、会桑排除、排除せず）、攘夷（①～⑦）、富国強兵論、開国論等々。

西郷、大久保について、家近良樹は次のように述べ、西郷、大久保が、多様な言説の渦中であって、一つの大論理に基づいて行動した原理主義者ではなく、状況に応じて言説を選択した政治家であったと評している。

「大久保、西郷らは志士以前に政治家であった。」「志士というのは自分

の理想のためには何もかも捨ててこれが一番の選択だと思えば、一命を投げ出して行動する。結果は必ずしも問わない。」「政治家は幾つかある選択肢の中から、ベストに近いと思われるものを選ぶ。」「彼らは自分たちの前にある複雑な幕末の政治情勢のなかで、実現できる可能性が高いもので一番いい選択肢をとっていかうとした。」<sup>23</sup>

本稿の構図に照らすと、一つの大論理に基づいて行動する原理主義者は、[B] (あるいは [A]) であり、状況に応じて言説を選択する政治家は、[C] となるが、こうした評の妥当性について考えてみたい。

まず、維新への動きが、1866 年 3 月の薩長同盟から戊辰戦争に一直線に推移したわけではないことは周知のとおりである。最終的に薩摩と長州の軍事力により倒幕が果たされたことから、その結びつきの端緒はどこなのかが求められるという源流探しとして、薩長同盟重視が通説的であったが、近年ではそうした解釈は支配的ではない。もちろん、早い段階から、長州藩士を中心として、拳兵による体制変革の言説は存在し、西郷も大久保も、そうした言説の存在を認知していた。そして最終的にはその言説を採用して具体化することになるが、だからといって、早い段階から、彼らもその思想を把持していたと断じることはできない。

おおよその流れを確認してみよう<sup>24</sup>。まず 19 世紀の国際関係の流動化の中で、外国との交渉の行方は、藩内経済に対する影響等から大藩には切実な問題となっており、国事周旋という形で、藩主等が幕府の政策へ関与することが望まれた。その一方、日米条約についての勅許が得られなかったことを通じて、幕府と朝廷の二重権力状況が生じ、京都が俄に国内政治動向の焦点となった。朝廷が政治的正統性の根拠と捉えられた背景には、後期水戸学などの勤皇思想の発展があったことはいうまでもない。この二重権力状態において、幕政関与へのチャンネルが確立していない雄藩は、朝廷を通じた政策関与をはかることになる。長州藩の動向がその典型といつてよい。そうした雄藩の動向により、また孝明天皇の頑なな攘夷思想もあり、権力の二重性はより際だってゆく。そうした過程で、幕府側は、京都守護職に松平容保（会津藩）を置き、一橋慶喜、会津藩、桑名藩の連携が京都で成立し、過激な長州の攘夷主義を朝廷から排除することに成功した。いわゆる一会桑による朝

廷支配である。とはいえ、情勢の進展の中で、難題は継続して生じる。たとえば、長州処罰問題であり、兵庫開港問題であり、横浜鎖港問題などである。1866年は、こうした難題を巡り、多様な言説が生まれ行き交った。1866年の半ばを過ぎ、第二次征長、また年末には孝明天皇死去などの事態が生じる。これにより1867年に入ると状況は一挙に流動化した。

その中で、大きな対立軸として登場するのは、幕府を排除した復古政権の実現と、幕府を含む議事院を設立して新体制とする構想であった。前者は幕府を排除する以上、それを実現するには軍事力の行使が必然的となる。後者は軍事的衝突をとりあえず回避して妥協成立する可能性がある。西郷、大久保は1867年には挙兵によって、一気に幕府を倒し、朝廷中心の体制を構築するという展望を確定的に持つようになる。しかし、薩摩の場合、西郷、大久保が実権を握ったと評しても、藩主を説得し、慎重派を圧倒しなければ挙兵の正当性を藩内に確立することは難しい。むしろ大政奉還という慶喜の決断によって、67年10月以降は、西郷、大久保は劣勢に立たされた。

大政奉還により、従来の統治システムはリセットされ、王政復古はとりあえず果たされる。新しい体制については着地点の振りが大きく不明確である。ただ中央政治のアクターの多くは身分制に守られた世襲藩主、公卿等である。新制度については、身分秩序を大きく覆すものではなく、漸進的なものを望み、そうした言説が増すだろう。この点では、西郷、大久保と小松帯刀との間にも亀裂が入りかねない。

その巻き返しを図った王政復古のクーデタも、12月24日段階では想定した結果をあげ得ていなかった。徳川慶喜を政権に参与させることで王政復古体制の円滑化を図ろうとする言説が支配的となりつつあった。西郷、大久保には圧倒的に不利な状況の中、12月25日に江戸薩摩藩邸の焼き打ち事件が起こる。この報せが数日後、京にもたらされたときに、薩摩藩の挙兵の意志が固まり、鳥羽伏見の戦いとなり、最終的に帰趨が決まった<sup>25</sup>。ただし、この戦いについても、銃装備などは幕府軍がやや進んでいた部分もあり、勝敗は流動的であった<sup>26</sup>。西郷、大久保にとっては、鳥羽伏見は、暗中飛躍であったに違いない。

こうした幕末の政治過程をたどってわかるのは、幕末の過程が、薩長連合

から戊辰戦争、倒幕、維新政府樹立まで一直線の過程では決してなかったということである。そもそも西郷も大久保も藩主ではなく、一存で藩兵を動かすことはできないし、藩内には拳兵に対する反対論も根強い。長州、土佐などの思惑も流動し、小松帯刀と西郷、大久保は、一心同体ともいえない。特に大政奉還後は王政復古という [B] の言説が一定程度実現してしまったため、新たな [B] をどのように設定するかを巡り難しい局面となる。西郷、大久保は幾度も窮地に追い込まれ、場合によっては文字通り命運が尽きてもおかしくはなかった。血気にはやる下級武士たちの言説や行動、徳川との歴史的な経緯、ともすれば保身的となる上層部、イギリスやフランスの商人や政府の思惑、そうした諸言説により状況は、めまぐるしく流動したのである。

西郷、大久保は [C] の状況で、個々の言説を理解しながら、王政復古を徳川を排除した形で徹底するという [B] の言説を把持した。とはいえ、最終的な暗中飛躍が成功したとき、西郷が抱いたのは「天」、つまり [A] への視座ではなかったか。それが維新後の西郷の行動を律したように思われる。この [A] への視座は、佐藤一斎の著作を介した陽明学的素養により育成された。内村鑑三が西郷を評価したのは、西郷の持つ [A] へのまなざしによるところが大きい。

### 3. 攘夷思想から民権思想

地域のリーダーが攘夷運動に加担してゆく状況は、たとえば藤村の『夜明け前』に生き生きと描かれている。彼らは通商を求める西洋文明への反発を契機として、平田国学などを学び、尊皇攘夷運動に参加した。この経験が、明治期の民権運動の全国的規模での高揚につながったという見解がある<sup>27</sup>。時間的な隔たりもごくわずかな両者は、いずれも体制に対しての異議申し立てであるという点での共通性がある。ただしその際、民権運動の源流を探るという観点から、幕末を見る場合と、逆に、新選組の活動から、後をたどって民権運動を見る場合とでは、見え方がやや異なってくる点に留意したい。つまり、遡行してみる場合には、民権運動の民主主義的先進性を攘夷運動の中に見いだそうとすることになり、逆に後をたどれば、尊皇攘夷の感情暴発

的側面、反体制的側面、権力希求の割り込み志向などを、民権運動の中に見いだすことになる（後者の側面が顕著であれば体制側は、厳しく弾圧しようとするだろう）。本稿では、後者の視座の可能性について検討してゆく。

幕末から民権期の地域リーダーには、その地域全体に献身するという公共意識と、それに伴い生じる上昇志向とがある。こうした意識を言葉に代えたり、行動に表現するものとして、漢学と剣術があった。寛政期から文久期にかけて各地における藩校の増設と私塾の急増が見られ、その結果、下級武士や豪農層の間に儒学が大衆的基盤で受容されるに至った<sup>28</sup>。「武術英名録」にあげられた632人の剣士のうち、藩士39人を除くと、残り593人の多くは百姓身分であり、江戸後期、武術の世界は、百姓身分出身者が大活躍をする時代になっていたという<sup>29</sup>。もちろん農民たちが剣術にいそむ背景には、防犯という実利的側面もあった。この幕末には外国船の来航や幕藩体制の動揺などで村の治安は急速に悪化し、そのような中、村落指導者に郷土防衛意識が芽生え、剣術が広まったと考えられている<sup>30</sup>。とはいえ、講談などで語られる武將的世界（源義経、楠木正成、加藤清正など）や、身分的上位者として帯刀して現れる武士等に対しての憧れ、そして上昇意識が強く存在した。

ここで、ともに浪士組に加わった根岸友山と近藤勇を取り上げてみる<sup>31</sup>。二人には、農民の出自であること、程度の差はあれ剣術と漢学をたしなんだこと、攘夷思想を持ちそれを浪士組参加という行動に移した点など多くの共通性がある。しかし、近藤勇は新選組組長として幕府に殉じ、根岸友山は、長州藩とのつながりを持ち、また相楽総三の江戸攪乱の動きに加担しようとした。漢学、剣術、攘夷などの言説を共有しながら、政治的決断としては正反対の方向をたどることになった要因なども考えながら、簡単に両者の状況を追ってみよう。

根岸友山は、1809年、現在の埼玉県東松山近郊の豪農の家に生まれた。儒学は山本緑陰から、剣術は千葉周作にも学んだという。天保4、5年頃に漢学塾「三余堂」を開塾し、また剣術道場「振武所」の看板を掲げた。そうした友山と尊皇攘夷運動との係わりは、長州藩とのつながりを契機とする。長州藩は、江戸異変の時に世子などを中山道をたどって帰藩させる計画で、

その途中の滞り場所として根岸家を選択した<sup>32</sup>。この長州藩との係わりで、友山は長州藩邸に出入りするようになり、多くの藩士から尊皇攘夷思想の啓蒙をうけた。さらに友山は、江戸での活動から、諸国の浪人、草莽などとも交際を広げ、世情をさらに知るようになり、国難打開には尊皇攘夷を貫徹しなければならないと高揚するに至った。その後友山は、清河八郎とのつながりで浪士組に応募し、京に出るが、清河とすぐに江戸に戻る。清河八郎の暗殺後に新徴組が組織され、友山もこれに加わり、江戸市中見回りを命じられた。だが尊皇も攘夷の決行も望めないとして隊士の多くが離脱しはじめ、友山も 9 月に帰郷する。ただ、この頃、薩摩藩は挙兵倒幕の一環として江戸を攪乱しようと企て、志士をつのっていた。これに応え三田の薩摩藩邸に集合した隊員は 500 人という。友山はこれには加わらなかったが、門人の小川香魚、小島直次郎を参加させた。隊の総裁には相楽総三があてられ、野州、甲州、相洲に分かれて挙兵し、倒幕戦をするべく実行に移された。野州では 11 月末出流山での挙兵となり、根岸友山も出流山に向かうが、これに合流する前に、出流山挙兵は包囲殲滅された<sup>33</sup>。

近藤勇は、多摩川の北岸地域である武蔵国多摩の出身であり、土方歳三もそのなじみであった。現在でいえば、調布市野水あたりである。そこから多摩川を遡った五日市では、明治期に、五日市憲法草案が起草されている。

近藤勇の攘夷思想については松浦玲『新選組』が詳しい。松浦は、近藤勇も熱烈な尊皇攘夷論者で、多摩にはそれを受け入れる基盤があったとしている<sup>34</sup>。ただし、多摩川北岸のこの地域にどのような基盤があったのかは自明ではない。というのもこの地域は幕府の直轄地であり、八王子千人同心や、葦崎の江川の影響下にあったからである。むしろ現状の江戸幕府に対しての信頼と忠誠の方が勝っていたと考える方が自然だろう。近藤勇と昵懇であった佐藤彦五郎なども、現体制に組み入れられた存在であり、近藤の浪士組への参加も佐藤彦五郎からの依頼によったとも考えられる<sup>35</sup>。近藤の尊皇攘夷の思想は佐幕と矛盾しない尊皇攘夷であった<sup>36</sup>。

根岸と近藤の方向性の違いは、思想的言説の違いから生じたものではない。根岸友山は、長州藩士とのつながりの中で倒幕に加担することを選択し、近藤勇は、佐藤彦五郎との関係、幕臣としての武士身分が与えられたことへの

恩義などから薩長の志士と対峙した。これをみると、行動を規定する[B]の言説は、思想的に体系化されたものとはばかりは限らないことがうかがえる。むしろ、思想よりも人的なつながりに牽引され、人は実際の行動を選択する傾向がある。

関東、とくに武相地域の民権運動と、これらの攘夷思想は、どのような共通性を持つのだろうか。渡邊欽城『三多摩政戦史料』は次のように述べている。

「憲政創始時代に於いて三多摩壮士の名が、天下の視線を集めるまでに一身に賭して活動した事は、決して偶然の出来心ではない。其の因は既に叙したる多摩の過去が然らしむるものと断言し得る、即ち其の血統、土風、伝習に於いて然うである。痛切に言えば近藤、土方の如きも壮士であった。」「近藤土方両士の如きは遺憾なく壮士の本領を發揮し其の範を示したものである。近くは明治時代に入りて板垣退助の民権論を唱うるや、三多摩志士は多数を挙げて同主義を取り、生命財産を賭して専制抑圧を事とする明治政府に反抗し、関東に於ける民権拡張の先駆を為した」<sup>37</sup>

明治期に入り、10年ほど経過すると、体制は一定の安定をみる。大きく開かれているように見えた扉は閉ざされつつあった。そうしたなかで、主体意識を再び与えてくれたのが民権運動であった。従って民権運動は、暴政に対して自由権を守る防御的なものであるよりも、むしろ政治参加を通じた体制変革的傾向を帯びている。倒幕ではなく、倒明治政府といった色調を帯び、そのために、民権運動は、激しく弾圧されることになる。民権運動においても、剣術と漢学という軸は継続している。維新後10年ほどの経過で、地方の私設の道場が相次いで閉鎖されるということはなく、初等教育制度がすぐに貫徹するという事もないからである。結果として、民権運動は、表面的な言説は異なるとしても、新たな尊皇攘夷運動という性格をもったとって過言ではない。

このことは、ルソーの受容のあり方からもうかがえる。『学問芸術論』『人間不平等起源論』という初期著作の主要テーマは、18世紀の文明批判であり、ルソーの思想の核はそこにあった。そして『社会契約論』は、そうした墮落

した文明から、人間が本来の美しい魂を持つ、自由な存在となるための処方箋として描かれている。しかし、明治期でのルソー受容では、そうした文明批判の部分は捨象し、参加民主主義の思想家としてルソーは一面的に受け止められた。そして数多く起草された憲法草案でも、防御的な自由権の思想は、一般に薄いものとなっている。

### 【注】

- \*1 幕末維新の過程が、歴史の流れの必然的帰結ではなかったことは、そうした政治判断のあり方を考えることによっても、明らかになるだろう。歴史学で if を問題としてはならないという言説の由来は不確かであり、20 世紀の経済的決定論に由来するとも、E.H. カーの『歴史とは何か』に由来するともいわれている。カーは、歴史は事象の因果関係を探求する学であり、if を考えても得ることはないとする。そのときカーは、時々の事象により、その後の事象が規定され、大きく変化するということを前提としていたに違いない。だからこそ、現在が過去にいかん規定されているのか、その道筋をたどることが歴史学の課題であるとした。しかし、カーの言が一人歩きし始めると、その因果性は法則性であるかのように誤解され、現在が必然性の上に成立しているかのような印象を生み出してしまうことがある。あるいは、権力性をもってストーリーが与えられ、それ以外の道はあり得ず、それが最も望ましかったかのような印象を生んでしまう。過去の事象が現在を規定するように、現在の判断が未来を規定する。そうした意識を持つことは、歴史学を実践的で現実的な意味を持つ学に昇華させる。
- \*2 松浦玲『新選組』岩波新書 2003 年。
- \*3 古くは明治期の坂崎紫瀾著『汗血千里の駒』をあげることができる。これは民権運動の観点から坂本龍馬像を描いたものであった（知野文哉『坂本龍馬の誕生』人文書院 2013 年）。これにとどまらず、民権運動の時期には、幕末維新の志士たちに自分たちのルーツを見いだそうとする場合があった。たとえば植木枝盛も、明治 18 年『報国纂録：慷慨義烈』を編集して、志士たちの活動を「慷慨義烈の志士が鞠躬尽力改革の大業を謀り粉骨碎身報

国の志を貫かんと欲し、或いは鮮血を濺て之に培い、或いは生命を捧げて犠牲に供し矢って天下の人民をして覇政の横虐を免れしめんことを計画したる事業」であるとし、吉田松陰の書簡、真木和泉の歌などを収録している。

- \*4 色川大吉『自由民権の地下水』岩波書店1990年115頁。
- \*5 ただ、そうした知見は西洋思想に固有の成果ではない。2000年ほど前、仏教思想の「空の思想」によれば、言葉は確固たる実在物として存在しているわけではなかった。真理に到達するには、言葉を介在させない直覚によるのか、それとも有限である人間は無限に到達することは出来ないと諦観するのか、様々な考え方が生まれた。
- \*6 たとえば、仏教という言葉を考えてみよう。仏教の意味の核として「仏陀の教え」が考えられそうである。だが、日本の多くの人たちが極めて仏教的と考えている墓や祖霊信仰は、仏陀の教えには含まれていない。では、仏陀の教え以外は仏教ではないとして、墓や祖霊信仰を仏教とは異質なもののとして排除しなければならないのだろうか。あるいは仏陀の教えが最もよく現れている原始仏教こそがほんとうの仏教であり、中国を経て日本に伝来した教えや経典は、仏教ではないとすべきなのだろうか。仏教については、まず仏陀の教えがあり、仏滅後、弟子たちが聴聞した教えが経典として結集され、それが地域を越えて広がり、長い時間をかけて伝えられ、また様々に議論解釈されるという空間的、時間的な広がりがある。そして、そうした簡潔に捉えることができない膨大な総体を、漠然と対象として仏教という言葉は用いられる。
- \*7 「尊皇攘夷」と「尊皇」と「攘夷」は結合されて語られる。「攘夷」については、政策選択にかかわり幅がある言葉であるが、「尊皇」については体制選択とも係わり幅がある。幕藩体制を前提として朝廷を尊崇するという場合でも尊皇を掲げることができるが、他方、王政復古の意味で尊皇を掲げれば、倒幕を意味する。
- \*8 後期水戸学、王政復古の主張などは、その典型である。これらは④の攘夷とは調和的に結び、⑤の攘夷とは、強い作用反作用で関係で共存する。この二つは、明治半ばには、欧化主義と日本主義という形をとることになる。そして西欧化の成果が一定の段階に達すると、両者は作用反作用の力

を弱め、変質して融着し、日本の軍国主義の核を構成するようになる。

- \*9 町田明広は、「大攘夷」「小攘夷」を「未来攘夷」「即時攘夷」と置いている（町田明広『グローバル幕末史』草思社 2015 年）。「大攘夷」「未来攘夷」は、開国して国力を蓄え将来的に夷狄に勝利するというもので⑤に該当する。「小攘夷」「即時攘夷」は、直ちに攘夷を執行するもので、②、④にあたる。別の類型としては佐々木克による 4 つの類型化がある。佐々木は 1. 武力の行使を覚悟の上で、勅許の得ていない条約を破棄すべきと考えるもの、2. 列強と交渉して一度条約の廃棄を実現し、そのうえで挙国一致の体制でわが国より開国すべきとするもの、3. 破約攘夷に正面切って反対を主張しないが、破約攘夷などほとんど可能性がないと思っているもの、4. 勝海舟のような積極の開国論者、がいと整理し、尊攘派といわれるのは、このうち 1 であると論じている（佐々木克『大久保利通と明治維新』吉川弘文館 1998 年 49 頁）。
- \*10 町田明広『攘夷の幕末史』講談社現代新書 2010 年 80 頁。
- \*11 高野澄『清河八郎の明治維新』NHK ブックス 2004 年 12 頁。
- \*12 『勤王文庫第 4 編』大日本明道会、大正 8 年 241 頁。
- \*13 前掲書 282 頁。
- \*14 『中岡慎太郎全集』勁草書房 1991 年 208 頁。また中岡は、「上下一致學術を勵し、兵力を養い、早く攘夷の大典を立て、諸港の条約を一新し、遠海の国々迄も征服し会稽の恥を雪がざれば、死すとも止まずと決心する矣」（210 頁）と述べているが、「遠海の国々迄も征服」ということになると⑤の攘夷といえる。
- \*15 言語ゲーム論でしばしば具体例とされるケースだが、窓が開いている部屋で、窓のそばの人に対して、「今日は寒いね」という言明をなす場合、「窓を閉めてもらえないか」という依頼の意味を持つ。幕末において、「直ちに攘夷を執行すべきだ」と発言する場合、「幕府を倒すべきだ」「分制度を改変すべきだ」「物価の高騰はけしからん」など、そこには人、文脈により、多様な意味が込められる。後から振り返り、整理して書かれた教科書的歴史では、尊皇攘夷、開国佐幕という単純な対立軸で整理されるが、実際の歴史過程では、軸は多様で曖昧性を持っていた。
- \*16 1867 年において、薩摩藩は、幕府と長州藩のいずれかを選択しなければ

ならず、双方と連携することはあり得なかったとすることは、概念の多様性、解放性を捉えず、実体化の罠に陥っている（坂野潤治『西郷隆盛と明治維新』講談社現代新書2013年）。

- \*17 多様な言説を統合する言説があれば困難は解消する。しばしば近江商人の標語として語られる「三方よし」などもその一つだろう。売り手だけでなく、買い手、世間のいずれにも望ましいことを求めるものである。また、こうした状況を踏まえたところにミンツバーグの提唱がある。ミンツバーグは、現在のビジネススクールのようなカリキュラムは、経営者のトレーニングにはならないとしている。ミンツバーグが求めたのは、多様な文化経験など、一般教養的なものとコミュニケーションの実践的機会であった。このことは政治判断能力を育成するための一つの参考となる（『MBAが会社を滅ぼす』日経BP社2006年）。
- \*18 ホップズが描く人間は、外界からの刺激に受動的に行動する人間であり、そこには内発的主体性はなく、わずかに主体性があるとすれば、それは自己保存を希求することであった。[C]の場合、個々の言説は実体性をもつ閉じたものと見なされがちである。そうした閉鎖性は、自己の状況、他者の状況を冷静にみつ、自己の利益を様々に貫徹する態度をもたらす。
- \*19 妥当な政治判断は[C]と[B]の関係性を意識して、視点を移動させることであり、最終的にどれほど妥当であるのかは[B]の適切性が左右する。そして、[A]を志向する視座の有無が人を納得させる。
- \*20 前者の[C]を力の論理、後者の[B]を解放の論理と暫定的に置いておく。[B]への関心は、[A]に向かいがちであり、そうした方向性を持つ政治認識は、解放のための政治認識となる。
- \*21 こうした違いは歴史研究の場合、過去の人物の評価にも反映する場合がある。幕末維新の場合、一般に、大久保利通は[C]の政治家、西郷隆盛は[B]の人物と捉えられる。政治的技術、権力現象に関心のある研究者は大久保を好み、政治思想に関心の向く研究者は西郷を好みがちである。
- \*22 ウェーバーは、[B]あるいは[A]に向かう政治姿勢を信条倫理として退ける。
- \*23 家近良樹『江戸幕府崩壊』講談社学術文庫2014年218頁。
- \*24 以下の記述は家近良樹の一連の著作による。家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局』ミネルヴァ書房2011年、『江戸幕府崩壊』講談社学術文庫204

年、『西郷隆盛』ミネルヴァ書房 2017 年。

- \*25 幕末維新の過程で、どの出来事が御一新を確定したのかという問題は、心臓死と脳死を巡る問題にやや似ている。人の死のプロセスは、誕生の瞬間から全ての細胞が死ぬまでの長期に及び、その過程では、心臓停止と脳死が決定的な出来事とされている。御一新は、米国との条約締結から廃藩置県までの 20 年以上のプロセスであったが、不可逆の決定的契機は、鳥羽伏見の戦いであった。
- \*26 野口武彦『鳥羽伏見の戦い』中公新書 2010 年、野口武彦『幕府歩兵隊』中公新書 2002 年。
- \*27 家近良樹『ある豪農一家の近代』講談社選書メチエ 2015 年 49 頁。
- \*28 家近前掲書 53 頁。
- \*29 平川新『開国への道』小学館 2008 年 291 頁。「江戸の三大道場といわれた玄武館、練兵館、志学館だけでも数千人の門人がいたとされる。幕末の江戸には 300 もの町道場があったともいうから、剣術修行者の数は膨大であったに違いない。」
- \*30 新井勝弘編『街道の日本史 18 多摩と甲州道中』吉川弘文館 2003 年 128 頁。
- \*31 平川前掲書 314 頁。
- \*32 根岸友山・武香顕彰会『根岸友山・武香の軌跡』さいたま出版会 2006 年 75 頁。以下の友山の記述はいずれも同書による。
- \*33 前掲書 102 頁。
- \*34 松浦前掲書。
- \*35 浪士隊自体については、幕府の意図を巡り、清河八郎の詐術によるというもの、幕府の奸計によるという説に分かれる。前者は、王政復古思想の持ち主である清河が、幕府をだまして浪士組を組織したというものであり、後者は、幕府は清河を抹殺するために、敢えてだまされたふりをしたというものである。一般には前者と解釈されるが、清河が京から戻るとすぐに暗殺されたことを考えると、後者も全く根拠を欠いたものともいえない。ただ、いずれの説をとるかで、近藤勇が浪士隊に参加した経緯の解釈も異なってくる。前者なら、近藤はかなり積極的に参加したことになるが、後者の場合は、佐藤彦五郎から無理に頼まれ、「幕府への恩義、多摩代官へ

政治に係わる二つの観念をめぐって——明治 150 年に寄せて——（升 信夫）

の返礼、義兄弟の頼みとあらば、引き受けざるを得な」かったということになる（佐藤文明『未完の多摩共和国』凱風社 2005 年 165 頁）。

- \*36 近藤勇がどれほど尊皇攘夷の思想に加担したかは、井上松五郎『上洛日記』にある「近藤、天狗になり候」の解釈にも係わる。攘夷急進主義に加担したと考える場合は、この「天狗」を水戸の天狗党と解釈し、芹沢鴨に同調していると考え。他方、天狗になるというのは、偉そうにしているという通常の意味に解釈すれば、攘夷急進主義への加担の証拠は一つ消滅する。
- \*37 渡邊欽城『三多摩政戦史料』有峰書店、昭和 52 年（原著大正 13 年）60 頁。

（ます・のぶお 桐蔭横浜大学法学部教授）